———, 1993,「グラムシと文化支配の現在」片桐薫ほか（編）『グラムシと現代世界』社会評論社：158-181.
———, 1997,「グラムシとカルチュラル・スタディーズ」『月刊フォーラム』11月号，社会評論社：20-25.
———, 1996,「権力と対抗権力：ヘゲモニー論の射程」井上俊ほか（編）『権力と支配の社会学』岩波書店：101-119.
ラッシュ，C.，森下伸也（訳），1997,『エリートの反逆』新曜社.
リン，C.，渡辺雅男（訳），1997,『イギリスのニューレフト』彩流社.
Long, E. (eds.), 1997, *From Sociology to Cultural Studies*, Blackwell.
McRobbie, A., 1991, *Feminism and Youth Calture: From Jakie to Just Seventeen*, Macmillan.
Morley, D., 1992, *Television, Audience and Cultural Studies*, Routledge.
Morley, D. and Chen, D. K. (eds.), 1996, *Stuart Hall*, Routledge.
Nelson, C. and Gaonkar, D. P. (eds.), 1996, *Disciplinarity and Dissent in Cultural Studies*, Routledge.
Nelson, C. and Grossberg, L. (eds.), 1988, *Marxism and the Interpretation of Culture*, Macmillan Press.
O'Sullivan, T., Hartley, J., Saunders, D., Montogomery, M. and Fiske, J., 1994, *Key Concepts in Communication and Cultural Studies*, Routledge.
ローティ，R.，小澤照彦（訳），2000,『アメリカ　未完のプロジェクト：20世紀アメリカにおける左翼』晃洋書房.
Storey, J., 1993, *An Introductory Guide to Cultural Theory and Popular Culture*, Harvester/Wheatsheaf.
トムソン，E. P.，市橋秀夫・芳賀健一（訳），2002,『イギリス労働者階級の形成』青弓社.
ウイリアムズ，R.，若松繁信ほか（訳），1968,『文化と社会』ミネルヴァ書房.
———，若松繁信ほか（訳），1983,『長い革命』ミネルヴァ書房.
吉見俊哉（編），2000,『メディア・スタディーズ』せりか書房.
ウィリス，P.，熊沢誠・山田潤（訳），1985,『ハマータウンの野郎ども』筑摩書房.

【「解釈と実践」について深めるための参考文献】

G. ターナー，毛利嘉孝ほか（訳），1999＝1999,『カルチュラル・スタディーズ入門』作品社.
カルチュラル・スタディーズの成立からその方法論まで包括的に論じた入門書．カルチュラル・スタディーズの概要をバランスよくおさえている．

花田達朗・吉見俊哉・コリンC.スパークス編，1999,『カルチュラル・スタディーズとの対話』新曜社.
1996年，東京大学で開催されたカルチュラル・スタディーズの国際シンポジウムでの報告や討論をまとめたもの．ステュアート・ホールを始めイギリスのカルチュラル・スタディーズの論者とともに，日本における研究者たちの論考が含まれており，日本社会におけるカルチュラル・スタディーズの動向を知るのに便利な一冊．

上野俊哉・毛利嘉孝，2000,『カルチュラル・スタディーズ入門』筑摩書店.
二人の日本人のカルチュラル・スタディーズ研究者が執筆したコンパクトな入門書．この分野に関心のある人にとって，最初に手にするのに便利な一冊といえるだろう．

第8章　「どのように」と「なに」の往還
エンピリカルな構築主義への招待

中河伸俊

1　構築主義とは何だったのか

「構築主義（構成主義）」は，もはやニュースではない．このタームはすでに，14，15年前にはそうだったような，紹介されるべき舶来のノヴェルティ（新奇なもの）の域を脱して，私たちの社会学コミュニティの一隅に住みつくことを認められはじめているようにみえる．しかし，それがある程度流通し，さまざまな研究者によってさまざまな文脈で使われるにつれて[1]，この語は，新奇性のアピールを失くしただけでなく，目立って多義化しはじめてもいる．いっぽうに，従来の社会学への挑戦者として名乗りを上げた（はずの）構築主義という立場はじつはさまざまな限界や困難や不備を伴うとか，たいして新しく（あるいは生産的で）なかったとか，十分に方法論的にラディカルでないとか，あるいは，政治的に問題を孕んでいるなどという批判的コメントが[2]（この国の社会科学ではありがちな話だがそれほど実用もされないうちに）出てきている．と同時に，そうした批判的コメントはときに，関心や前提や狙いがかなり異なる別のタイプの「構築主義」を一まとめにして一刀両断する形で提示され，事態をますますややこしくしている．

本章の目的は，エンピリカルな構築主義と筆者が呼ぶアプローチの輪郭と方法論上の前提をできるだけはっきりさせ，それが社会学的探究をどのように方

1　たとえば，北澤・片桐（2002），鮎川（1994），上野・野村（2003），野口（2002），赤川（1999），田間（2001），渋谷（2003），佐藤他（2000），桜井（2002），片桐（2000），池岡ほか（1999），上野（2002），中河・北澤・土井（2002）.

2　たとえば，徳岡（1997），厚東（1998），西阪（1996；1999），馬場（2002），淺野（2001），天田（2001），松田（1996），好井（2003），長谷（2002），北田（2003），樫村（2004）.

向づけ，何を可能にするのかを示すことである．「エンピリカルな」というのは，上記のような構築主義の多義化（それはいちばんの広義で使われるときには社会学主義とほとんど同義語になってしまってさえいる）に対応し，自らの立場を明確化するために，筆者が暫定的に使う形容詞である[3]．このアプローチの直接の導きの糸となるのは，アメリカ合衆国で独自の展開を遂げたラベリング・パースペクティヴと動機の語彙論から社会問題の構築主義（Spector and Kitsuse 1977＝1990；中河 1999；平・中河 2000）へという流れ[4]である．この流れのエッセンスを，社会問題以外のさまざまな社会的な現象や出来事に適用すればどうなるかを吟味し，そうした作業の真剣な受け止めが社会学的探究のあり方のリハビリにつながることを示したいというのが，最近の筆者の（たぶんいささか誇大妄想気味の）願いであり，理論的関心である．とはいえ，筆者の志（こころざし）と方法論家としての力量とのギャップは歴然としている．そのため，以下の議論は詰めの甘い，借り着の重ね着の様相を呈するだろうことを，あらかじめお断りしておきたい．

まず初めに，エンピリカルな構築主義（筆者がかくあれかしと考える構築主義）のプロジェクトは何でないかを，手短に述べたい．第一にそれは，質的調査という既存の枠内に囲い込まれたコップの中の嵐ではない．後述するような社会学のリサーチ・クエッションの構築主義的転換は，経験的探究に際して「数えること」の否定に直結はしないが，その意義の再考[5]につながらざるをえない．第二に，それは，実証主義対ロマン主義という伝統的な対立軸の後者に回収されるものではないし，一部の論者が指向するような（Woolgar 1988; Burr 1995＝1997），反ポジティヴィズムの哲学的（あるいは反哲学的？）足場をうち立て，それに依って科学や社会科学を「丸ごと」批判しようとする試みでもない．私たちの多様な社会的いとなみの基底に一般的な理論的命題の一定のセット（実証主義や近代知のまなざし，世俗的存在論，資本制イデオロギー，家父長制イデオロギー

3　これまでは筆者は，同じものを指すのに，「エスノメソドロジーの洞察に学ぶ構築主義」という，据わりの悪い造語を使ってきた．「エンピリカルな」構築主義よりも，「批判的な」構築主義（たとえば上野 2000）が現在隆盛を誇っているというのが，筆者の状況判断である．その方法的前提については，中河（2004）も参照のこと．

4　さらにその背景として，同地のプラグマティズムや，シンボリック相互行為論として括られる動き，エスノメソドロジー，ウィトゲンシュタインやウィンチ，ライルらの系統の言語哲学を挙げることができる．

5　たとえば，西阪（2001），Schegloff（1993），Holstein and Staples（1992），中河（1999：2章），Lynch（1993）．

等々）をみて，その変更を通じて社会的（あるいは科学的，あるいは社会学的）いとなみを一挙的に塗り替えよう（あるいはその「外」に出よう）という「ラディカル」な試みは，人びとのいとなみがその場その場で内生的，偶発的（contingent）に組織化されるという事実を看過するか過小評価しているために，空振りに終わる公算が高い．第三に，エンピリカルな構築主義は，経験的世界のすべてをテクストに還元するような唯言説論ではない．人びとがことばやジェスチャーやその他のさまざまな資源を使って，実際の時間と空間の中で行う（あるいは行った）具体的な活動を調べることこそが，その関心事なのである．

では，筆者にいわせれば，構築主義と呼ばれる企ての意義はいったい何だったのか．乱暴ないい方をすれば，それは，人間や社会をめぐる学的探究の語用論的転回[6]ともいうべき動きの一コマだった．例証として，社会問題の構築主義のどこが新しかったのかを振り返ってみよう．このアプローチの提唱者たちは，問題だとされる「社会の状態」を研究するという従来の社会問題研究のプログラムから，クレイム申し立て活動，つまり「問題」の有無や定義や解決等々をめぐって織りなされる人びとの相互行為（あるいはコミュニケーション）の連鎖へと，調査研究のトピックを転換することを提案した（Spector and Kitsuse 1977＝1990）．「いじめ」であれ「ひきこもり」であれ「性差別」であれ「テロ」であれ「環境汚染」であれ，「社会問題」だとされる事象は，人びとが，社会生活の具体的場面の中で実際にそうしたことばを使ってやりとりをすることを通じてしか，私たちのまえに立ち現れない．とすれば，まずそうした人びとのやりとりと，その中での具体的な言語使用を調べることこそが，「社会問題」の研究の出発点であるはずだ．こうした主張を導く，クレイム申し立てという社会問題の構築主義のキーワードは，ことばの一般的な意味ではなくその具体的使用に私たちの目を向けさせる（言語学の分野でいえば構造主義的な意味論（セマンティックス）から語用論（プラグマティックス）へと関心の焦点をシフトさせる）という点で，いまにして思えば画期的な

6　ここでいう人文・社会科学の文脈での語用論的転回（pragmatic turn）は，構造主義の衝撃に続く言語論的転回の第二の波ともいうべきものであり，その方向性はたとえば「言語の意味とはその実際の使用」という有名なウィトゲンシュタインのモットーや，実践（言語行為）とそのコンテクストの相互関係への目配り（Goodwin and Duranti 1992）に代表されるだろう．こうしたベクトルは，いわゆるポスト構造主義の議論にも重なる部分があるが，現時点では，エスノメソドロジーにおいてもっとも純化されていると筆者は考える．この動きは，分析哲学の文脈でのプラグマティック・ターン（プラグマティズム的転回？），もしくは「言語論的転回のプラグマティックなひねり」（Sandbothe 2004）とも当然連動するが，しかし両者の関係はじつは微妙かつ入り組んでいるようだ．

ものだった[7]．こうした動きはもちろん，「語の意味とはその使用である」というウィトゲンシュタインの金言とも呼応する．語用論的転回という耳慣れない言い回しが指すのは，たとえば以上のようなことなのである．

2　「なに」と「どのように」：リサーチ・クエッションの選択肢

先に，構築主義はリサーチ・クエッション（調査研究の方向づけを示す問い）の転換をもたらすと書いた．私たちが調査研究に携わるとき，その活動の導きの糸となる実践的関心のあり方を要領よく指し示すのが，リサーチ・クエッションである．社会問題の構築主義の当初の提案の中で，とくに波紋をもたらし，支持者の間にさえ異論が出たのは，「かくかくの問題はなぜ生じたのか」という問いを問わない，つまり，クレイム申し立て活動を記述し考察するにあたって因果モデルを前提とした原因論の探究をしない，という方針だった．この重要な（そして躓きの石になりがちな）論点をどう考えるべきかについては，後でもう少しきちんと述べる．ここではとりあえず，エンピリカルな構築主義は，「なぜ（why）」という問いをしりぞけ，「どのように（how）」という問いと「なに（what）」という問いをリサーチの基本線にする，とだけいっておくことにしたい．

こうした問いの立て方の方法論的な意義や位置付けの，分かりやすい絵解きがある．グブリアムとホルスタインの『質的方法の新言語』（Gubrium and Holstein 1997）がそれである．かれらはこの本で，これまでの（主に米国の）社会学の質的探究の「方法の言語」を，（1）自然主義，（2）エスノメソドロジー，（3）感情主義，（4）ポストモダニズムの四つに区分し[8]，そのそれぞれの前提や特徴，持ち味やデメリットを論じた．エスノメソドロジー，感情主義，ポストモダニズムの三つは，長年質的探究（とりわけ民族誌的なモノグラフ）の主流の位置にあった自然主義に対して，近年盛んになった方法的反省の三つの方向だと理解してもよいだろう．

7　馬場（2002）の示唆による．ただし，この論文で馬場は，システム理論の立場から，こうしたシフトの陥穽，もしくはそれがもとの木阿弥になってしまう危うさを孕んでいることを指摘している．

8　ややこしいことに，グブリアムらは，この二つ目の姿勢を「構築主義（constructionism）」と呼んでいるが，ウィーダーをはじめ，論及されているのはすべてエスノメソドロジーの主要研究なので，ここではこう呼び替えた．

自然主義（naturalism）のリサーチ・クエッションは，単純化していえば，現場に「なに」があり，現地の人たちは「なに」をしているのかということである．いいかえれば，このアプローチでは，社会的現実は「現地へ行って，そこの人たちの中に入って観察すれば発見できる」という，素直な前提に立って調査が進められる．社会的世界の「自然な」環境の中に存在（実在）すると想定される現実のディテール，いいかえれば，研究対象となる人びとの行為や活動の諸特徴を「歪めることなく」正確に捕捉し記述することが，エスノグラファーの任務だとされる（この点については，Holstein and Gubrium 1995＝2004 参照）．自然主義的な民族誌研究の典型例として，グブリアムらは，ホワイトの『ストリート・コーナー・ソサエティ』（Whyte 1943＝1974）やリーボウの『タリーズ・コーナー』（Liebow 1967＝1997），アンダーソンの『街角の場所』（Anderson 1976）を挙げる．そうした研究では，特定の地理的な場所が調査のフィールドとして特定され，その場所で日常生活をいとなむ参与者の世界が，かれらが語るストーリーに依拠して記述される．参与観察を通じて「かれらの世界」の中に入ること，その活動の一部になってキイ・インフォーマントを獲得することが，調査の基本的な手順である（登場人物の記述はキイ・インフォーマントを中心にして行なわれ，他の登場人物は脇役に回される）．そうした民族誌的記述の中では，ネイティヴ（現地人）の証言は，基本的には額面どおりのものと受け取られ，そのまま使用される．自然主義者にとって，会話は，現地の社会組織がどのように作動するかの例証である．したがって，調査対象となる人たちの証言を，次にみるエスノメソドロジーの場合のように，構成的な視点から体系立てて吟味する作業は行なわれない．この立場に立つ民族誌的調査のガイドラインでは，（1）事前の想定を最少化すること，（2）人びとと一緒にいること（参与観察），（3）観察された「現実」を忠実に表示（再構成）すること，の三点が強調されることになる．このうちの三点目は，いいかえれば，自然主義的研究が記述のスタイルとして，いわゆる「リアリスト・テールズ（写実的物語）」（Van Maanen 1988＝1999）を採用するということである．

第二のエスノメソドロジー的な立場のリサーチは，「社会的世界はフィールドに行けばそこ（out there）にある」という自然主義の想定を離脱するところから始まる．この立場の大前提は，「人びとは，それについて観察し報告することが可能な，日常生活の秩序だった諸特徴を自分たちで作り出す言語的および相互行為的な能力を具えている」という認識である．エスノメソドロジスト

（とその知見に学んだ構築主義者）は，自然主義の研究対象である人びとの相互行為の成果ではなく，人びとがそうした成果を生み出す方法（やり方）を探究のトピックにする．つまり，リサーチ・クエッションを「なに」，つまり「どんな現実があるか」（what）から，「どのようにして現実が産出されているか」（how）へと変更する．そして，後者，つまり相互行為を通じて「なに」か（事象や出来事など）を達成する人びとの方法は「どのような」ものかという問いに焦点を合わせるために，前者，つまり「なに」が達成されているのかという内容への関心は「かっこに入れ」られる．こうした方針をとるエスノグラフィーのパイオニア的な研究例に，ウィーダーの『言語と社会的現実：受刑者の掟語りの事例』（Wieder 1988）がある．ウィーダーは，この本の前半で，薬物事犯者の治療ための中間施設の自然主義的な参与観察を通じて，収容されている受刑者たちの「掟」を同定した．そのあと，自分が依拠するデータを同書の第二部で再解釈し，自らの報告自体を現実産出活動の一部として位置付け直した．それによれば，受刑者の掟は，受刑者もしくは入所者，スタッフ，調査者が行為を「解釈する」ために使う言語的出来事である．「掟を語る」という活動は，ただ単に，あらかじめ「客観的」に存在する規則について説明したり，それを人や行いに当てはめたりする作業ではなく，「掟に反するもの」と「掟に適ったもの」を，具体的な相互行為場面の文脈の中で構成し，作り出す作業である．「掟」の一条に言及した，「おれがチクらない（密告しない）のは，知ってるだろ」という入所者のウィーダーへ向かっての発話は，具体的には，たとえば次のようなことを達成したとウィーダーはいう．それは，a）ウィーダーがたったいま自分に「仲間のことをチクる」ように要請したということを告げ（直前の出来事の定義），b）自分はウィーダーの問いには答えないということを示し（「自分の答は答ではない」），c）答えないという自らの行為の動機を示し（「チクりは施設の入所者にとってご法度」），d）自分とウィーダーの役割関係がスタッフ-入所者関係だということを思い出させ（「あんたが自分にそれを尋ねればチクりの要請になる」），e）自分とウィーダーの関係が公的な調査員とパロール（宣誓釈放）中の施設入所者であることを定式化する（Weider 1988: 168-169），といったぐあいに，まさにその発話の瞬間に，進行中の事柄についての多面的な文脈での関係と理解を構築した．ウィーダーによれば，「掟」を語ることは，こうして話者がそのただ中にいる相互行為場面を記述し分析し説明するだけでなく，さらに，入所者やときにはスタッフが説得を通じて一定の行為を導く方法であったり，

会話のトピックを停止したり変えたりするための装置として使われたり，示唆や命令を正当化する装置として使われたりもした．

エスノメソドロジーの方法論では，調査のフィールドは特定の地理的な場所に縛られないし，調査に当たって特定の社会的世界の「内側へ入る」ことは要請されない．その中で現実を構成するような相互行為が行なわれている（したがって「どのように」の問いが立てられる）あらゆる場所が，エスノメソドロジー的探究のフィールドになる．ただし，ウィーダーの「掟語り」の事例でも分かるように，こうした現実構成の活動を明らかにするには，ふつうの民族誌的報告の場合よりも，経験的事象をより精密に見てゆく必要がある．そこでは，場面の中にありながら同時に場面を構成する出来事としての会話と相互行為が分析の焦点になる．

第三の感情主義（emotionalism）は，グブリアムたちの造語である．「実存主義社会学」や「感情性の研究」，ある種の現象学的アプローチなどを含むこの立場は，この国の社会学の文脈では，むしろ「生きられた経験」主義とでも呼ぶほうが分かりやすいだろう．人びとの「ほんとうの経験」はどんなものなのか，というのが，この立場のリサーチ・クエッションである．いいかえれば，個人の経験の「内的」領域の深みに目を向け，調査者と読者が経験の真実を感じることが，その探究のゴールとなる．「『合理的に観察／報告可能』なものに対象を絞ることで，人間の研究に重要なさまざまな経験（それは不可避的に感情性を帯びる）が切り捨てられてしまう」というダグラスのガーフィンケル／サックス批判（Douglas 1977）にみられるように，この立場には，「冷たい」whatの問い（いわゆる「エスノメソドロジー的無関心」）が消滅させるものを回復しようという意気込みがある．そうしたゴールに向かって，研究者の感情的な没入が推奨される．自然主義的なモノグラフが基本的にニュートラルな調子で書かれるのに対して，感情主義のモノグラフの記述は，「告白体の物語」（Van Maanen 1988＝1999）のスタイルをとり，一直線に「主観的な大騒ぎ」へと躍りこむ．調査者対象の感情だけでなく，調査者の感情も記述され（Johnson 1975），「感情的なフィールドノーツ」が書かれる．さらに最近では，エリスとボシュナーの「個人的なストーリーを語り演じる」（Ellis and Bochner 1992）のような，ポストモダン風のナラティヴ・アプローチが採られたりもする．そこでは，主観性の複雑さを捉えることを目指して，フィールドとその表象，対象と調査者を区分せず，「体系的な内省」からデータを引き出すことが試みられる．得られ

た「内的経験」はドラマ化され，「感情を再演」する対話形式のナレーションとして提示される．

第四のポストモダニズムと呼ばれる動きは，質的探究の方法論に大きな衝撃を与えたが，そう呼ばれる議論の中身はじつは多様で，簡単に要約することはできない．しかし，ポストモダニズムの特徴の一つだとされる「メタナラティヴへの疑り深さ」（リオタール）を経験的研究の方法論の文脈に移植するなら，それは，方法論的な公準そのものが（それがサンプリングと統計的検定の理論であっても，分析的帰納法であっても，エンパシーについての指示であっても），研究対象としての「存在」との科学的関係を取り扱うものではなく，一種のレトリックとみなされる，ということを意味する．一言でいえば，「ある」とされるものを徹底的に疑えというのが，この立場のポリシーだといっていいだろう．社会学の調査研究は，「経験的事実」と繋留されて「真実」という特権的立場を確保していることになっているが，それはじつは一種の文学的な詐術の果実ではないのか．たとえば，エスノグラファーの著述は，結局エスノグラファーが自らの視点や構成的手法に沿って書いた「エスノグラファーの物語」，つまりは一つのフィクション（Clifford and Marcus 1986＝1996）ではないのか．

こうした懐疑は，経験的探究のいとなみを危うくする．エスノグラフィーは経験性への繋留を解かれ，他のあらゆる種類の言説と同列の「単なる表象」になる．とすれば，質的調査は，社会学者自身のそれを含めた，表象実践の研究にならざるをえない．そうした針路は，表象についての原理的認識だけでなく，「近代は終わった」という時代診断によっても下支えされる．たとえば，メディア研究などに大きな影響を与えてきたハイパー・リアリティ論がその例である．電子メディア（とくにテレビ）が，近代的な空間と時間（つまりは現実）の整序を壊した．それによって，世界への経験的な足場が崩れた以上，「リアル（現実＝実在）」はもはや成り立たなくなり，現実は，記号／記号についての記号／記号についての記号についての記号／……の戯れの場となった．こうした系統の議論の始祖ボードリヤールは，ポストモダン状況についての自らの診断を例証する出来事として，1990-91年の湾岸戦争を取り上げる（Baudrillard 1991＝1991）．

ポストモダニズムの強力な懐疑を受け入れれば，実質的な what を見出す余地も，経験的な how を同定する余地もなくなる．ホワイトの「コーナーヴィル」，リーボウの「ニュー・ディールお持ち帰り店」，アンダーソンの「ジェリーズ」は，実在の場所ではなく，「特定の道徳的空間内でのレトリック上の錨」にすぎないということになる．感情主義がこだわる経験の深さもまた自然なものではなく，ロマン主義化された表象にほかならないとされる．「リアル（現実＝実在）」は根こそぎ消去され，そこに残るのはハイパーリアル，つまり，イメージと純粋な表象の世界だけになる[9]．ただし，以上のように，きわめてニヒリスティックな宙吊りの表象の世界のヴィジョンを掲げる「否定的」ポストモダニストに対して，「リアル」の全面的な放棄に留保をつけて，ポストモダニズムと社会学の折り合いをつけようとする「肯定的」ポストモダニストもある．たとえば，自然主義（シンボリック相互行為論）から出発したデンジンは，階級や人種，ジェンダーのあり方に目をつぶり，ニヒリスティックなスタンスを取ることは質的探究にとって有害だという．彼の『ポストモダン社会の諸イメージ』（Denzin 1991）は，ポストモダン派の社会学的探究の表象志向の一例である．デンジンは，ボードリヤールに倣って，〈現代の世界のメンバーは，シンボルの海を漂流する窃視狂であり，自分自身のことをカメラの目（映画とテレビ）を通して知る〉，という「社会の映画化」テーゼを立て，視覚文化のエスノグラフィーを提示した．

欲望や無意識といった精神分析の概念の援用や脱構築など，ポストモダニズムには他にも多様なモチーフや論題があり，とうてい一口では論じられない．ただし，その中でも，方法論に関わるものとして，リフレクシヴィティ（エスノメソドロジーの基本概念である「相互反映性」より，「自省性」などと訳されるグールドナーらが広めたタームのほうに近い）と質的研究の著述スタイルについての論点には，目配りをしておく必要があるだろう．自分たちの「科学的」な研究成果の記述が，他の表象と同じく「単なるそしてまったくの」表象にすぎないということが承認されると，次のステップとして，次のような問いが問われる．そうした自分たちの記述は，どのような暗黙の想定や表象実践に依拠して構成され

9　これに対して，グブリアムとホルスタインは，「ハイパーリアルがどのように実践に結びつくかについて，ボードリヤールの著述にはほとんど手がかりがないし，人びとの日常の出会い（相互行為）に，テレビのチャンネル・ホッピングや多相的なイメージ形成（multiphrenic imagining）のような実践が組み込まれているという証拠もない」と批判し（Gubrium and Holstein 1997: 79），また，「自己の溶解」を説くポストモダン自己論に対して，それでも私たちは日常的に自己をいとなんでおり，そしてそのいとなみは相互行為の詳細を見ることを通じて経験的に捕捉可能だと反論する（Holstein and Gubrium 2000b）．

ているのか．また，自分たち研究者の記述は，どのような仕掛けを通じて，他の表象と比べて特権的なものとして流通するのか．この種のいわゆる「ラディカルなリフレクシヴィティ」の問いに導かれた自己解剖は，たとえば，「(社会学的あるいは科学的な) 議論のエスノグラフィー」(Woolgar and Pawluch 1985=2000) や「エスノグラフィーのエスノグラフィー」(Van Maanen 1988=1999) といった形で構想される．さらに，そこから一歩進んで，質的探究の報告の書き方 (あるいは表現の仕方) の変更も試みられてきた．「モダニズム (近代主義) の超克」という (この国の哲学の歴史を知る人にはどこか耳懐かしい) スローガンを掲げて，より開かれた，もしくは，ポストモダンの「表象の戯れ」をよりよく捕捉できる多面的な表現の方法が探し求められてきた．テクストを複数の「声」(バフチン) によって構成する試みや (Schneider 2003; Schneider and Wang 2000) 「きれいに整理されていない (messy)」テクストの提示，インタビュー対象の語りに対応するため散文を捨てて詩形式をとることなどが，その例である．さらには，文字メディアを離れ，演劇や映像表現に依拠する実験もある (McCall and Becker 1990)．

以上の，グブリアムらが整理した四つの選択肢 (自然主義，エスノメソドロジー，感情主義，ポストモダニズム) のうち，二番目に依拠しながら一番目を再構成する，すなわち「どのように」の問いに軸足を置きつつ，「なに」が産出されているかという問いも捨てない，というのが，いわゆる構築主義論争を総括したホルスタインらの論文に倣って (Holstein and Gubrium 2000a)，筆者がエンピリカルな構築主義と呼ぶものの基本方針になる[10]．

10　整理の手際はいいが，方法論家としては心優しすぎるグブリアムらは，『質的方法の新言語』では，自分たちが同定した四つの方針をぜんぶ採用し，その間を適宜行き来して質的研究を進めることを提案する．しかし，それぞれの方法論的前提の懸隔を考えるとき，この提案は現実的ではない．対して，日本の『犯罪社会学研究』誌に寄せられたこの論文での方針は，無理が少ないだけでなく，かれら (グブリアム，ホルスタイン，ミラーやそれに近いエマーソン，スペンサー，グロー，ロウスキら) が実際にやってきた経験的研究のアウトプットともよく符合する．なお，紙幅の都合から，なぜ第三の感情主義，第四のポストモダニズムを採るべきではないか，について本章では論じないが，一言でいえばそれは，私たちの研究の手順を十全にエンピリカル (観察／報告可能) なものの範囲内に設定するためである．この点については，舌足らずではあるが，本章の母体となった論文 (中河 2001) に管見が示されている．

3　エンピリカルであることと「なぜ」の回避

「なに」と「どのように」の往還という調査研究の方針については，後でもう少し詳しく述べることにして，その前にまず，エンピリカルな構築主義が原因論，つまり「なぜ (why)」の問いを採らない理由を説明したい．それは，一言でいえば，エンピリカルであるため，言い換えれば，人びとが携わって紡ぎ出すさまざまな活動を，その活動 (の文脈内でのレリヴァンス) に即して記述し考察するためである．

「なぜ」の因果的説明は，『自殺論』や『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』といった古典を振り返るだけで分かるように，「科学的」な社会学の成立の重要な契機だった．社会 (科) 学的な原因論は，[独立変数 X→従属変数 Y]，つまり X という先行の社会的要因が Y という後続の行為や出来事や事柄を引き起こす，という説明様式をそなえた因果モデルにのっとり，当該の行為や出来事や事柄の出来(しゅったい)について，一般的な法則性の同定と (あわよくば) 一定の予測可能性の実現を目指す[11]．こうした「なぜ」の問いは，統計的解析の技法以上に，自然科学をお手本にしようとするポジティヴィストの探究プログラムの根幹でありつづけてきたといっていいだろう．ここでいう変数とはもちろん，「自殺」や「犯罪」や「家族」や「社会的紐帯」や「プロテスタンティズムの理念」や「経済的利害関心」といった，社会の状態や集合的な個人の状態の一般的なカテゴリーである．つまり，そうしたカテゴリーは，そのそれぞれが (たとえばデュルケムが『自殺論』の冒頭で「自殺」について行ったように) 一般的かつ論理的に精密な形で定義され，さらには，経験的分析に供するために，具体的な個々の事例に当てはめ該当事例を同定できるような，具体的な適用基準が明らかにされている (つまり命題を構成する変数がそれぞれ操作化されている) 必要がある．こうした一般的な変数間の法則的関係は，研究者の営為に先だって世界の中に「ある」．したがって，研究者の使命は，命題-検証といった「科学的」な手続きに沿って，そうした「すでにある」(しかしそうした方法的手続きを利用しない人たちには隠された) 法則的関係を発見することである．

11　ただし，北田 (2004) の論考が示唆するとおり，後者の歴史主義的な因果関係についての理解を，あからさまにポジティヴィスト的な前者と同じに扱うことはもちろん妥当ではない．

社会問題の社会学の分野で構築主義が物議をかもすもとになった主張の一つが，この種の原因論の回避である．スペクターとキツセは，『社会問題の構築』(Spector and Kitsuse 1977＝1990) で，機能主義的な社会問題へのアプローチが経験的探究にあたって方法上の困難を抱え込むと指摘し，社会の状態から社会の状態を定義する人びとの活動（クレイム申し立てをはじめとする社会問題活動 social problems activities）へと研究のトピックを転換することを提案した．これは当然，「自殺の社会的原因は？」とか「ヘイトクライムが増加しているのはなぜ？」といった従来のような社会問題の原因論を（「かっこに入れる」とか「時期尚早な問いを問わない」といった微妙な言い回しをくっつけてではあったが結局はいっさい）問わないということを意味する．

しかし，社会の状態を定義する人びとの活動を研究する，といえばすぐさま，別のタイプの「なぜ」の問いが出てくる．特定のクレイム申し立て活動が登場し，幅広い支持を集め，その目標を達成した（する）のはなぜ，というのがそれである．たとえば，19世紀から20世紀初めにかけての禁酒運動はなぜ（どんな社会文化的状況・要因の帰結として）生まれたのか (Gusfield 1963)．あるいは，「モーターサイクルに乗った危険な若者たち」をめぐるモラル・パニックはなぜ起こったのか (Cohen 1972)．スペクターとキツセの構築主義プログラムは，こうしたタイプの原因論的説明も追い求めないという点で，徹底していた．かれらは，ミルズらの動機の語彙論を導きの糸にしながら，「価値」や「利害関心」といった社会運動（クレイム申し立て活動）の原因と目される「変数」も，じつは人びとの定義活動の中で使われる言語的資源の一部なのであり，つまり，私たちが研究の対象にする活動の原因ではなくその構成要素なのだと主張した[12]．「地位」や「階級」や「権力」や「規範」や「ジェンダー」や「エスニシティ」等々，社会学理論の定番になっている社会構造的「変数」についても，同じことがいえる．これらは，人びとの活動にその外側から影響を与える原因などではなく，人びとの活動の文脈の中でレリヴァント（適切）なものとして使用さ

12 『社会問題の構築』5章．こうしたタイプの原因論も回避するという点が，SMO（社会運動組織）の研究でのクランダースマンやギャムソンらの構築主義アプローチや，SSK（科学的知識の社会学）の分野でのバーンズやブルアらのストロング・プログラムと，スペクターとキツセの社会問題の構築主義との決定的な違いである．とはいえ，いわゆるコンテクスト派の議論 (Best 2003) にみられるように，いまなお社会問題の構築主義的研究者間にこの点についてすっきりした合意があるわけではなく，方法上のイシューとして議論の種になっていたりもする (Bogard 2003)．

れるときにのみ，人びとのいとなみ立ち現れ，人びとの活動の組織化に関わる言語的資源であるにすぎない．

この節の冒頭で示唆したように，「社会問題」をめぐる人びとの活動を調べよう，という構築主義的社会問題研究の提案の最大のメリットは，調べる対象をエンピリカルに捕捉し，観察／報告することができるという点にある．私たちは，「社会問題」や「社会システム」や「世論」や「価値」や「利害関心」を直接に（つまりエンピリカルな現象を何らかの「代表 (representation)」の手順を通じて変換することなしに）観察することはできないが，抗議したり，告訴したり，問い合わせをしたり，約束をしたり，論争をしたり，デモをしたりといった人びとの活動を見聞きし，報告し，それをめぐる「どのように」や「なに」について記述し解析することはできる．この意味での調査可能性こそが，スペクターとキツセが従来の社会問題研究を批判するにあたっての立脚点だった．そうした人びとのやりとり（相互行為）の観察は，山や川や樹木といった客体の自然現象としての観察とは，種類を異にする．『社会科学の理念』でウィンチ (Winch 1958＝1977) は，自然科学的研究と社会学的研究との違いを，次のように述べる．自然科学者は，ただ一組の規則，「つまり科学者の研究それ自体を規定している規則を取り扱えばよい」が，「社会学者が研究している対象とは，彼の研究そのものと同じく，一つの人間の活動であり，したがって規則に従って営まれている」(Winch 1958＝1977，強調は原文による)．つまり，社会科学者は，対象のそれと自分たちのそれの二重の規則性に関わることになる．ここで大切なのは，前者の規則性，つまり社会学者の活動に先だってある人びとのいとなみの秩序性の観察は，その人びとが当該のいとなみを組織化する際に依拠するのと同じ種類の言語的コンピタンスによって可能になるということである[13]．

ここまでの議論に対して，次のような反論がありうるだろう．ポジティヴィストの因果モデルはたしかに，自然科学をお手本にしようとするあまり，人び

13 これに対して，「あなたがいうのは，要するに行為の意味の理解が必要だということだろう．そんなことは，ヴェーバー以来のいわゆる意味学派の社会学では常識で，何ら新しいことではない」という反応が容易に想定できる．しかしながら，ここではそうした水準のことをいいたいわけではない．個人の「内面」や「頭の中」にあるとされる意味や動機の理解（これを推奨すればまたぞろ方法論上の難題が出てくる）ではなく，人びとが言語（広義の）を使って具体的にしていることが，かれらと同じやり方で言語を使うことができる研究者には「わかる」．そのようして「わかる」ことが社会現象の探究の出発点だというのが，エンピリカルな構築主義の基本的スタンスである．

とのいとなみからかけ離れた形で一般化された諸変数間に，統計的なつながりを見出すことで事足れりとする悪弊に陥っているといえよう．しかし，だからといって，一般化によって法則的命題を得るという企てそのものが間違っているわけではない．誇大理論を代表とするトップダウンの抽象的な命題を，事例の数を頼みに計量的に「検証」するポジティヴィストの研究の手順に問題があるのだ．まず，経験的事例を集め，それらを個別に比較し吟味して共通点を見出すという手順で一般化を行って，ボトムアップの地についた命題を導き出すべきだ．そうした手順によって導かれた命題が示す因果関係ならば（ましてやそれが人びとの活動は言語シンボルによる意味付けを介して組織化されるという正当な視点を踏まえているなら），それは妥当なものだといえるだろう．

こうしたやり方，つまり帰納法に基づく方法論は，米国のエスノグラフィックな研究の伝統の中で，一定の支持を集めてきた．たとえば佐藤哲彦は，シカゴ学派からシンボリック相互行為論に至る系譜の薬物使用研究をレビューして，実証的・科学的な分析的帰納法（リンドスミス，ベッカーら）と，「薬物使用者自身の観点から薬物使用者の世界を描き出そうと」するエスノグラフィックなアプローチ（ブルーマーら）の二つの流れを同定する（佐藤 2003）．後者は，先のグブリアムとホルスタインの用語でいえば，自然主義にあたる．いいかえれば，シカゴ学派からシンボリック相互行為論へという流れは，自然主義的なエスノグラフィーに依拠しつつ，その方法論を「科学化」しようと試みるときには，蓋然性とサンプリングの理論や相関係数（さらにはもっと洗練された種々の解析技法）で鎧った計量の命題-検証モデルの対抗馬として，より素朴な経験論を背景に持つ分析的帰納法を旗印として掲げてきた（宝月 1980；Gubrium and Holstein 1997: 34-35）．近年日本でもとりわけ医療関係の分野でよく知られるようになったデータ対話型理論（グラウンデッド・セオリー）（Glaser and Strauss 1967＝1996）も，基本的には同種のアプローチである．社会問題の構築主義も，こうした流れと無縁ではない．スペクターとキツセの『社会問題の構築』は，新しい研究プログラムとして社会問題の自然史の探究を提案する際に，一定の留保をつけつつも分析的帰納法の援用を示唆している（同書7章）[14]．

14　ただし，この自然史モデルは，提案されはしたが，それにもとづく経験的研究はあまり行われていない．キツセ自身も，のちに日常言語的資源（とりわけレトリック）に注目する調査プログラムへと路線変更したが，そのときに分析的帰納法と手を切り，言語論的な直観アプローチに移行した．

エンピリカルな構築主義が，その点についてはキツセらと袂を分かち，帰納法の手順に依拠しないのは，次のような理由からだ．第一に，これは近年よく指摘されることだが，この立場の論者は，ケース（事例）というものは，現場に行けば（あるいは現場での観察を記録したフィールドノーツを虚心坦懐に眺めれば）自ずと同定可能なものとして「そこにある」というまさしく自然主義的な想定に依拠してきたが，これは素朴にすぎる．この点では，データの理論負荷性を認める計量系の洗練された方法論者（たとえばFord 1975＝1982）のほうが，まだましだといえる．実際，データ対話型理論の沿革とそれをめぐる方法論争（二人の創唱者グレーザーとストラウス間の深刻なそれを含む）をレヴューしたチャーマズは，こうしたナイーヴさを自覚し，それを乗り越えるべく構築主義的なデータ対話型理論（！）を提唱する（Charmaz 2000）[15]．しかし，データを構成するとされるケースが構築物であるという指摘よりさらに重要なのは，この種の帰納的一般化の手順が，ケースとして切り取られる社会的な行為や出来事の個別的な適切性（レリヴァンス）を度外視したものではないかという点である．

先に，ウィンチを引いて，「社会学者の活動に先だってある人びとのいとなみの秩序性」に目を向けることこそが社会学的探究の出発点だと述べた．帰納的一般化の機械的な（しかしじつは社会学や専門職の世界や常識などのカテゴリーや「理論」や推論の方法を暗黙のうちに補助線にした）実践は，そうした相互行為場面の内側からのみ読み取り可能な秩序性を無視し，それにとっては外的な法則性や因果関係についての命題を導き出していはしないか．そうした実践から自然科学（とりわけ物理学）と同じような，隠された一般法則の発見が，はるか彼方にではあれ展望されるのなら，それもまたポジティヴィズムの一つのヴァージョ

15　チャーマズは，意味と解釈を強調するブルーマー流の社会科学（いわゆるシンボリック相互行為論）と一致する「構築主義的なデータ対話型理論」アプローチを提唱する．「構築主義的なデータ対話型理論は，観察者（viewer）がデータを創出し，観察される者との相互行為を通じて分析を続けることを認識する．データは，現実へ通じる窓を提供しはしない．そうではなくて，『発見された』現実は，相互行為の過程と，その時間的，文化的および構造的コンテクストから生まれる．調査者と調査対象は，相互行為を枠付け，そこに意味を付与する．したがって，観察者は，観察されたものから切り離された存在ではなく，観察されたものの一部である」（Charmaz, 2000: 523-524）こう考えるなら，ケースからの帰納的命題化を飽和に至るまで続けるというグラウンデッド・セオリーの手順は，客観的な法則の同定に至る順路ではなく，多様な社会的現実の探究のための発見的（ヒューリスティック）な便法ということになる．チャーマズの議論は，主観／客観や過程／構造といった二分法を払拭していない点がひっかかるものの，相互行為的な「意味」の達成に目を向けるという点で，彼女のいう「客観主義的」データ対話型理論よりは健全にみえる．

ンであり，私たちが考えるような意味でのエンピリカルな（つまり人びとの活動の実際に即した）探究ではないといわざるをえない．

ここまで，因果モデル（原因論）の構図そのものより，社会学的分析において通常それとペアになっている一般化や普遍的な法則定立への志向をターゲットにして議論してきた．それでは，一般化を排した，個別の活動や出来事の間の因果連鎖についてはどうだろうか．一般論としての（しかも他の条件が同じならという条件付きの）変数 X→変数 Y に懐疑的な私のような論者も，たとえばある人が友人から職場の近くに店したイタリア料理店のパスタは他店より安くて美味しいと教えられたので（x）翌日さっそくその店へ行った（y）とか，ある小学生が級友のいじめを受け（x）ある日から学校へ行か（け）なくなった（y）とか，ある重罪を犯した（とされる）人物に地方裁判所で懲役二十年の判決が言い渡されそれが確定した結果（x）その人物はその土地の刑務所に送られた（y）というような，個別的・歴史的なレベルでの因果関係までは否定できないのではないか（ex. 北田　2004）．

こうした因果連関は，私たちの日常的な記述と推論の中にしょっちゅう登場し，その重要な構成要素の一つになっているといっても過言ではない．と同時に，こうした個別の行いや出来事は，じつは種々の一般的なカテゴリー（レストランや食事や犯罪や判決やいじめ等々）の使用を通じて組織化されており，上記のような因果関係の推論はある意味で，そうしたカテゴリー（概念）の意味の文法の産物だともいえる．しかしここでは，私たちがこうした個別レベルの原因論の「なぜ」をもリサーチ・クエッションにしない理由を，もう少し別の角度から説明したい．因果モデルによる人びとの活動の連鎖の概念化は，多くの場合，一言でいえば，矢印の向きが逆なのである．

スペクターとキツセは『社会問題の構築』で，「構造」や「心理」を独立変数とする社会学的／社会心理学的な因果モデルの替わりに，「社会問題」をめぐる人びとの活動の過程，もしくは「一続きの糸」を調査対象とする継起モデル（sequential model）を提唱した（Spector and Kitsuse 1977＝1990：5章）．かれらの議論の中では必ずしも明確ではなかった人びとの活動の流れのイメージを，筆者はのちに，「言及（参照）の連鎖」として概念化した（中河 1999：1章）．ビリヤードの棒でボールを突けば（x），突かれたボールが転がる（y）．人びとのいとなみにおける先行の行為や活動や出来事と，後続の行為や活動とのつながり方は，こうした力学的現象とは性格を異にする．先行の行為や活動や出来

事は，後続の行為や活動を引き起こすのではなく，人びとがそれを相互行為の中で言及のトピックにすることを通じて，後続の行為や活動の条件もしくは文脈の一部となる．エスノメソドロジーと会話分析の成果が教示するように，人びとは，局所的に（〈ここ・いま〉において）行為や場面や人びとの社会的位置やその他の事柄を総体として「わけがわかる」ものにするために，さまざまな事柄を参照して，実践的推論（これは活動の内側からその活動を組織化するような推論でもある）を行う．過去の行為や活動や出来事も，もちろん，ひんぱんにそうした参照と言及（レファレンス）の対象として使われる．

いいかえれば，因果モデルにおいて独立変数として位置付けられる先行の行為や出来事や「心理」や社会の「状態」は，後続の行為の原因ではなく，後続の行為や出来事を有意味（理解可能）なものとして成り立たせる推論作業の中で，人びとが使うレファレント（参照の対象）にすぎない[16]．ミルズの動機の語彙論が先駆的に示唆したように，［先行の行いや状態→後続の行い］という因果関係ではなく，［後続の行い⇒先行の行いや状態］という方向での言及関係が，人びとの活動のつながりの基本線なのである．これは，〈コミュニケーションがコミュニケーションに接続されることによってのみ社会システムは可能になる〉というルーマン系のシステム理論の主張（馬場 2001：45）と，パラレルな見方といえるだろう．スペクターとキツセがしばしば使う条件依存性（もしくは偶発性 contingency）というタームは，たぶんこうした事情をいい当てるためのものである．

16　ある種の行為や活動の連鎖は，ハードな因果関係のようにみえるかもしれない．「法廷での実刑判決」から「被告の収監」に向けて，因果の矢印をつけたいという気分は分からなくもない．しかし，それはあくまで，人びとの活動が，あたかもそれがハードな因果関係であるかのように組織化されているということにすぎない．いっぽう，Aの会釈を見たBが口元に笑みを浮かべてAを見たとき，「Aの会釈がBの笑みを引き起こした」というよりは，「Aの会釈に気付いたBが笑みで応えた」というほうが，私たちの実感に適合するだろう．しかし，先行の活動と後続の活動のつながり方についていえば，両者の間に本質的な違いはない．どちらの場合にも，先行の活動は，後続の活動が意味あるものになるための条件になっている（判決がないのに収監されるとか，AがBのほうを見もせずスタスタ歩いて行くのにBがAに笑いかけるというのは――理解可能にするための「意味付けの修繕」が不可能でないとはいえ――，「腑に落ちない」ことだろう）．因果モデルも，ある意味では，その説明の対象となる行為や出来事，事柄を有意味（理解可能）にする試みには違いないし，学問的にもあるいは日常生活の中でも，実践的な有用性を持つ説明様式である．しかし，社会科学的な因果モデルの「有意味（理解可能）」性は，学問的いとなみの中でのみ成り立つものであり，多くの場合，対象となる人びとのいとなみの秩序性に肉迫しない．

4　「どのように」と「なに」の往還，および別種の「なぜ」の可能性

ここまでの説明で，私たちの立場，つまりエンピリカルな構築主義やその方法論におけるコーチと呼びたいエスノメソドロジーが，極端な主観主義であり，非歴史的な〈ここ・いま〉主義（個別状況主義）であるというよくある物言い（たとえば田辺 2003：79-80）は，冤罪であると分かってもらえたのではないかと思う．人の行いは，人びとの具体的な活動（相互行為）の流れの中に位置付けられてはじめて意味がある，つまりは了解可能なものになる．相互行為は，言語やジェスチャーやその他のシンボル（これらを日常言語的資源と総称することにしたい）を使って組織化されるが，それらのほとんどは当然，その場で発明されたものではない．過去に制定された刑法の条文や関連する判例を知っているからこそ裁判官は判決を書けるのだし，PTSDという「心の病い」がヴェトナム戦争復員兵の運動に応える形で合衆国の精神医療診断マニュアルに記載されるに至り（Scott 1990＝2000），その概念が近年この国にも普及したからこそ，私たちは夫に暴力を振るわれた妻の心的外傷や心のケアについて語ることができるのである．

特定の相互行為場面で起こっていることが分かるためには，そこで参与者が使っている日常言語的資源が使えなければならない．そうなるために，つまり言語や「常識」だけでなく適切な「ローカルな知識」（Gubrium and Holstein 1990＝1997：9章）や専門知識が使えるようになるために，調査者はしばしば，参与観察や文献資料の参照吟味といった作業を求められるだろう．ただし，こうしたエスノグラフィックな作業の目的は，ウィーダーが受刑者の「掟」について行ったように，参与者に準ずる日常言語的資源使用のコンピタンスを身につけることであり，たとえばブルデューがいうような「相互行為のなかには完全に含まれていない」「目には見えない社会関係，あるいは客観的構造」（田辺 2003：80）を参照できるようになることではない[17]．人びとの活動（相互行為）は，先行の活動を文脈として構成（かつ参照）しつつ，自体を「内側から」構成する．その活動を「統べる」ように見える規範や規則（たとえば受刑者の「掟」）もまた，その活動の中で使用されることを通じて，それ自体をその都度的に成り立たせる．したがって，そうした規範や規則とリンクするとされる「ジェンダー」や「階級」や「エスニシティ」等々の「構造的」カテゴリーが私たち（調査者）にとってレリヴァントなのは，そうしたカテゴリーが参与者たちの活動の組織においてレリヴァントである場合に限られる．エスノグラフィックな作業は，つまりは相互行為をつぶさに見るための順路であり，そして，相互行為裡に立ち現れないもの（たとえば，無意識に埋めこまれた構造性，呈示されない内的経験，「語り得ないもの」等々）は，エンピリカルな構築主義にとっては，語るのを避けるべき怪力乱神のたぐいなのである．

私たちの世界内のあらゆる「もの（thing）」は，コミュニケーション（相互行為）を通じてしか立ち現れないが，しかしそれは私たちにとって，「単なる虚構」ではなくリアルな事柄である．人の「死」が社会的構成物だ（Sudnow 1967＝1992）ということは，さまざまな形でそれに関わる人たちにとってそれがリアルではないということではないし，ナーシングホームの入所者たちの間の「家族の絆」（Gubrium and Holstein 1990＝1997：7章）も，「天皇を冒瀆する似非芸術の版画」（中河 1999）も，「緊急の援助措置に値するようなホームレスであること」（Spencer 1997）も，それに関わる人たちのいとなみの中では，それぞれのあり様に沿ってシリアスである．そうした「もの」もしくはwhatを人びとが産出する方法への関心，すなわちhowの問いに沿って人びとの活動の探究を進めるための道具立てとして，ホルスタインとグブリアムは，エスノメソドロジー起源の言説実践（discursive practice）の研究にフーコー流の系譜学を接続したものを構想する（Holstein and Gubrium 2000a）．ここでどうしてもフーコーに登場を願わなければならないのかどうかについては検討の余地がありそうだが，それはさておき，こうした「どのように」の問いを潜ることによって，私たちは，さまざまな活動の文脈の中にその都度的に立ち現れつつ，しばしば一貫した存在として語られ取り扱われる各種の「もの」＝whatの相貌に，物象化を回避しつつ肉迫することができるだろう[18]．

17　エンピリカルな構築主義とブルデューの立場の違いを押さえるには，グブリアムらの『家族とは何か』（Gubrium and Holstein 1990＝1997）と，ブルデューによるそのレヴュー（Bourdieu 1996）の併読が手っ取り早い．いわゆるブルデュー理論は，ときにそのプラクシス（実践）概念が，人びとの行いの即興性をよく捕捉しているとして評価される．しかし，エンピリカルな構築主義の立場からすれば，その骨格はむしろ，ソシュール起源の構造概念とマルクス主義的な社会構造概念を密通させた強固なトップダウンの構造理論である．

18　本章でいうwhatとhowはたぶん，馬場（2002）のいうコンスタティヴとパフォーマティヴの区分に対応する．

グブリアムらは，すでに「家族」や「自己」についてそうした試みの可能性を示しているが（Gubrium and Holstein 1990＝1997; Holstein and Gubrium 2000b），その研究プログラムはまだ方法論的に十二分に練れているとはいえない．また，より徹底したエスノメソドロジー的立場からの，how の探究に徹底すべきであり，what を見ることとの往還のメリットは疑わしい（あるいは，そうした試みは方法論的に危うい），という反論が予想される．そもそも，一頃よく語られた「エスノメソドロジー的無関心」という概念自体が，そうした批判を含意しているように思われる．エスメソドロジー的探究のために折角かっこ入れした what を再導入すれば，what の存在論的地位や規範的正しさをめぐる問い（「どの what が本当に在り，どの what が紛いなのか」，「どの what のあり方が正しいのか」）のような，エンピリカルな社会学にとっては不毛な議論を引き入れてしまう危険があるから，そんな企てはよしたほうがいいのではないか．こうした指摘には，一理がある．さらには，how を見ようとすれば what が見えなくなり，what を見ようとすれば how が見えなくなるのだから，二つの問いをつなぐ研究プログラムなど画餅だ，という批判もありうるだろう．しかし私は，同時という形容をややゆるやかに捉えるなら，how と what は人びとの活動の中で同時に見えているのだと思う．絵画におけるフレームのように，議論を戦わしたり睦言を交わしているときの会話のターンの取り方や互いの姿勢・表情のように，あるいは，テレビドラマにおける登場人物の行いと俳優の演技のように，私たちにとって how が「見えているが見えていない」ことがそもそも，what が立ち現れる条件なのではないか[19]．とすれば，二つの問いの往還を試みることは，無茶でも徒労でもないだろう．そうだとしてもなぜ殊更にそんな面倒なことを，という問いにはとりあえず，「なに」への論及なしに人びとのいとなみの十全な記述はありえない，という臆断からです，と答えるしかない．

最後に，「なぜ」の問いの話に，今一度立ち戻ろう．「なぜ」の問いは，私たちの日々のやりとりに頻出する重要な語彙の一つだが，それは原因の探究（「赤い鳥はなぜ赤い？」）だけでなく，動機や論理的説明の提示の要求（この文の3行前の「なぜ」もその種のものだ）であったりもする．また，過程の記述がその答になることもある．「あの人，なぜそんなことをしたの」という問いに対して，あの人がそんなことをするに至った経過を詳しく説明すれば，そこに原因と因果連関が同定されていなくても，それで納得が得られることもある．社会学者に執拗に寄せられる「なぜ」の問いかけに対して，グブリアムらが用意する「how と what を経由した why の解明」（Gubrium and Holstein 1997; Bogard 2003）という対応は，基本的にはその種のものだと思われる．

たとえば，「なぜあの人は自分を性同一性障害と同定したか」という問いに対して，「それは，あの歴史的時点で，そういうカテゴリーとそれに伴う理論が利用可能だったから」という答え方がある．しかし，それが利用可能だということは，そうした同定を含む「あの人」のいとなみにとって外的な「原因」ではなく，じつはそのいとなみ，その活動の一部分なのである．いいかえれば，それは what の問いと how の問いの領分内にある．ここから，そうした同定の具体的場面（医療カウンセリングの現場や性同一性障害者の HP でのチャット等々）に目を向ければグブリアムらのいう言説実践の探究が，そうした同定の材料になるカテゴリーや理論の出自に目を向ければ言説史的探究（系譜学）が導かれる．このうち，外的な「原因」の・ようなものの提示につながるのは，後者である．その時点での共時的な言説空間とその中での言説（日常言語的）資源の分布状況という概念を措定し，「そうしたカテゴリーや理論や知識やイメージが普及したから」あの人はそうした同定を行ったと説明することで，そこに因果的説明の・ようなものが立ち現れる．しかし，注意しなければならないのは，これはあくまで「の・ようなもの」，つまりは数多くの相互行為場面の〈ここ・いま〉で営々と繰り返されるカテゴリー使用の一種の速記であり，本来的にはそれもまた，what と how の領分を超越したものではないということである．

以上，三つの疑問詞，つまりはリサーチ・クエッションを手がかりにしながら，私たちのヴァージョンの構築主義的探究のいくつかの要点を述べた．もちろん，これ以外に構築主義のやり方はないと決めつけるほど，筆者は傲慢ではない．ただ，構築主義的発想を批判の用途に使うにあたっても，人びとのいとなみに「役立て」応用することを目指すにあたっても（中河 2005），本章で一貫してこだわってきた「エンピリカルであること」をめぐる諸課題は，レリヴ

19　これは構築主義者の一部にみられる，メンバーには how が見えないとみなし，how の観察を調査者の特権的なキャパシティとして位置付ける（メンバーは物象化された世界に住み，いっぽう調査者の反省的ないとなみは脱物象化的である，といったように）想定が誤っている，ということでもある．調査者は，参与者と同じ方法と資源を使って観察を行うしかない．とすれば，あるいとなみの参与者に，そのいとなみの組織化をめぐる how が「見えていても見えていない」のは，そのいとなみの中の実践的関心にもとづいて「なにかしている」ときには，how の詳細の観察にかかずらわっているいとまはない（あるいはそれにかかずらうと「やっていること」の流れから外れる）ということにすぎない．つまり，認識のキャパシティのではなく，実践上の問題にすぎない．

アントなものであるだろうと考える。

【文献】

赤川学，1999，『セクシュアリティの歴史社会学』勁草書房.
天田城介，2001，「構築主義の困難：自己と他者の〈語る場所〉」『現代社会理論研究』11：1-15.
浅野智彦，2001，『自己への物語論的接近：家族療法から社会学へ』勁草書房.
鮎川潤，1994，『少年非行の社会学』世界思想社.
Anderson, Elijah, 1976, *Place on the Corner*, University of Chicago Press.
Atkinson, J. Maxwell, 1978, *Discovering Suicide: Studies in the Social Organization of Sudden Death*, University of Pittsburgh Press.
馬場靖雄，2002，「構成と現実／構成という現実」中河伸俊ほか（編）『社会構築主義のスペクトラム』ナカニシヤ出版.
Baudrillard, Jean, 1991, *La Guerre du Golfe n'a pas eu lieu*, Galilée.（＝1991，塚原史訳，『湾岸戦争は起こらなかった』紀伊国屋書店.）
Best, Joel, 2003, "But Seriously Folks: The Limitations of the Strict Constructionist Constructionist Interpretation of Social Problems," in James A. Holstein and Gale Miller (eds.), *Challenges and Choices: Constructionist Perspectives on Social Problems*, Aldine de Gruyter.
Bogard, Cynthia J., 2003, "Explaining Social Problems: Addressing the Whys of Social Constructionism," in James A. Holstein and Gale Miller (eds.), *Challenges and Choices: Constructionist Perspectives on Social Problems*, Aldine de Gruyter.
Bourdieu, Pierre, 1996, "On the Family as a Realized Category," *Theory, Culture & Society*, 13: 19-26.
Burr, Vivian, 1995, *An Introduction to Social Constructionism*, Routledge.（＝1997，田中一彦訳，『社会構築主義への招待』川島書店.）
Charmaz, Kathy, 2000, "Grounded Theory: Objectivist and Constructivist Methods," Norman K. Denzin and Yvonna S. Lincoln (eds.), *Handbook of Qualitative Research, 2nd*, Sage: 509-535.
Cohen, Stanley, 1972, *Moral Panics and Folk Devils*, MacGibbons & Kee.
Denzin, Norman K., 1991, *Images of Postmodern Society*, Sage.
Douglas, Jack D., 1977, "Existential Sociology," in Jack D. Douglas and John M.Johnson (eds.), *Existential Sociology*, Cambridge University Press: 3-73.
Ellis, Caloryn and Arther P. Bochner, 1992, "Telling and Performing Personal Stories," in Carolyn Ellis and Michael G. Flaherty (eds.), *Investigating Subjectivity*, Sage: 79-101.
Ford, Julienne, 1975, *Paradigms and Fairy Tales, Vol.2.*, Routledge & Kegan Paul.（＝1982，本間康平ほか訳『思考のパラダイム（下）』紀伊國屋書店.）
Glaser, Barney G., and Anselm L. Strauss, 1967, *Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*, Aldine.（＝1996，後藤隆ほか訳『データ対話型理論の発見』新曜社.）
Goodwin, C. and Duranti, A. (eds.), 1992, *Rethinking Context: Language as an Interactive Phenomenon*, Cambridge University Press.
Gubrium, Jaber F. and James A. Holstein, 1990, *What Is FAMILY?*, Mayfield.（＝1997，中河伸俊ほか訳『家族とは何か』新曜社.）

———, 1997, *The New Language of Qualitative Method*, Oxford University Press.
Gusfield, Joseph R., 1963, *Symbolic Crusade: Status Politics and the American Temperance Movement*, University of Illinois Press.
長谷正人，2002，「『文化』のパースペクティヴと日本社会学のポストモダン的変容」『文化と社会』，マルジュ社：56-74.
Holstein, James A. and Jaber F. Gubrium, 1995, *The Active Interview*, Sage（＝2004，山田富秋ほか訳『アクティヴ・インタビュー：相互行為としての社会調査』せりか書店.）
———, "An Interpretive Analytic for Social Problems,"『犯罪社会学研究』25：29-48.
———, 2000b, *The Self We Live By: Narrative Identity in a Postmodern World*, Oxford University Press.
Holstein, James A. and Gale Miller (eds.), 2002, *Challenges and Choices: Constructionist Perspectives on Social Problems*, Aldine de Gruyter.
Holstein, James A., and William G. Staples, 1992, "Producing Evaluative Knowledge: The Interactional Bases of Social Science Findings," *Sociological Inquiry*, 62: 11-35.
宝月誠，1980，『暴力の社会学』世界思想社.
池岡義孝・木戸功・志田哲之・中正樹，1999，「単身生活者による家族の構築：構築主義的な家族研究のアプローチの試み」『人間科学研究』12(1)：75-92.
Johnson, John M., 1975, *Doing Field Research*, Free Press.
樫村愛子，2004，「現代社会における構築主義の困難：精神分析理論からの再構築可能性」『社会学評論』219：189-208.
片桐雅隆，2000，『自己と「語り」の社会学：構築主義的展開』世界思想社.
北田暁大，2003，『責任と正義：リベラリズムの居場所』勁草書房.
———, 2004，「『ポスト構築主義』としての『プレ構築主義』：Weber と Popper の歴史方法論を中心に」『社会学評論』291：281-297.
北澤毅・片桐隆嗣，2002，『少年犯罪の社会的構築：「山形マット死事件」迷宮の構図』東洋館出版社.
厚東洋輔，1998，「総論　社会学の理論と方法 I　日本の社会学の戦後50年」高坂健次・厚東洋輔（編）『講座社会学 I　理論と方法』東京大学出版会：19-41.
Liebow, Elliot, 1967, *Tally's Corner*, Little, Brown.（＝1997，吉川徹監訳『タリーズ・コーナー：黒人下層階級のエスノグラフィ』東信堂.）
Lynch, Michael, 1993, "Method: Measurement-Ordinary and Scientific Measurement as a Ethnomethodological Phenomenon," in Graham Button (ed.)., *Ethnomethodology and the Human Sciences*, Cambridge University Press.
McCall, Michal M. and Howard S. Becker, 1990, "Performance Science," *Social Problems*, 37: 117-132.
松田素二，1996，「『人類学の危機』と戦術的リアリズムの可能性」『社会人類学年報』22：23-48.
Marcus, George E., and Michael M. J. Fisher, 1986, *Anthropology as Cultural Critique*, The University of Chicago Press.（＝1989，永渕康之訳『文化批判としての人類学』紀伊國屋書店.）
中河伸俊，1999，『社会問題の社会学：構築主義アプローチの新展開』世界思想社.
———, 2001，「方法論のジャングルを越えて：構築主義的な質的研究の可能性」『理論と方法』29：31-46.
———, 2004，「構築主義とエンピリカル・ソサーチャビリティ」『社会学評論』219：244-259.

———，2005，「応用構築主義と批判的構築主義：構築主義の有用性？」「フォーラム現代社会学」1：72-78.
中河伸俊・北澤毅・土井隆義（編），2002，『社会構築主義のスペクトラム』ナカニシヤ出版.
西阪仰，1996，「差別の語法：問題の相互行為的達成」栗原彬（編）『差別の理論』明石書店.
———，1999，「社会問題の語り口について」『明治学院論叢』624：5-21.
———，2001，「数量化の実践：『よい』記録の組織上の『よい』理由」船津衛（編）『アメリカ社会学の潮流』恒星社厚生閣.
野口裕二，2002，『物語としてのケア：ナラティヴ・アプローチの世界へ』医学書院.
桜井厚，2002，『インタビューの社会学：ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
佐藤哲彦，2003，「薬物使用の質的研究における説明と記述：シンボリック相互作用論における科学性・合理性とディスコースの分析」『犯罪社会学研究』28：82-95.
佐藤純一・池田光穂・野村一夫・寺岡伸悟・佐藤哲彦，2000，『健康論の誘惑』文化書房博文社.
Sandbothe, Mike, 2004, "The Pragmatic Twist of the Linguistic Turn," in William Egginton and Mike Sandbothe (eds.), *The Pragmatic Turn in Philosophy: Contemporary Engagements Between Analytic and Continental Thought*, SUNY.
Schegloff, Emmanuel A., 1993, "Reflections on Quantification in the Study of Conversation," *Research on Language and Social Interaction*, 26: 99-128.
Schneider, Joseph, 山口毅（訳），2003，「『オントロジカル・ゲリマンダリング』以降：厳格派構築主義からリフレクシヴ／回析的なエスノグラフィへ」『文化と社会』4号，マルジュ社：36-56.
Schneider, Joseph, and Wang Laihua, 2003, *Giving Care, Writing Self: A "New" Ethnography*, Peter Lang.
Scott, Wilber J. 1990, "PTSD in DSM-III: A Case in the Politics of Diagnosis and Disease," *Social Problems*, 37: 294-310.（＝2000，馬込武志訳「DSM-IIIにおける心的後ストレス障害：診断と疾病の政治学における事例」平英美ほか（編）『構築主義の社会学』世界思想社：193-232.）
渋谷知美，2003，『日本の童貞』文藝春秋.
Spector, Malcolm and John I. Kitsuse, 1977, *Constructing Social Problems*, Cummings.（＝1990，村上直之ほか訳『社会問題の構築』マルジュ社.）
Spencer, J.William, 1997, "Homeless in River City: Client Work in Human Service Encounters," in Gale Miller and James A.Holstein (eds.), *Social Problems in Everyday Life: Studies of Social Problems Work*, JAI Press: 149-164.
Sudnow, David, 1968, *Passiong On: The Social Organization of Dying*, Prentice-Hall.（＝1992，岩田啓靖ほか訳『病院でつくられる死』せりか書房.）
平英美・中河伸俊（編），2000，『構築主義の社会学』世界思想社.
田間泰子，2001，『母性愛という制度：子殺しと中絶のポリティクス』勁草書房.
田辺繁治，2003，『生き方の人類学：実践とは何か』講談社.
徳岡秀雄，1997，『社会病理を考える』世界思想社.
上野千鶴子（編），2002，『構築主義とは何か』勁草書房.
上野加代子・野村知二，2003，『〈児童虐待〉の構築：捕獲される家族』世界思想社.
Van Maanen J., 1988, *Tales from the Field: On Writing Ethnography*, The University of Chicago Press.（＝1999，森川渉訳『フィールドワークの物語：エスノグラフィーの文章作法』現代書館.）
Wieder, D. Lawrence, 1988, *Language and Social Reality: The Case of Telling the Convict Code*,

University Press of America [Originally published in 1974 by Mouton in Hague, The Netherlands.]（＝1987，山田富秋ほか訳「受刑者コード：逸脱行動を説明するもの」[抄訳] 山田富秋ほか訳『エスノメソドロジー』せりか書房：155-213.）
Winch, Peter, 1959, *The Idea of Social Science and Its Relation to Philosophy*, Routledge & Kegan Paul.（＝1977，森川真規雄訳『社会科学の理念』新曜社.）
Whyte, William F., 1943, *Street Corner Society*, The University of Chicago Press.（＝1974，寺谷弘壬訳『ストリート・コーナー・ソサイエティ』垣内出版.）
好井裕明，2003，「『臨床的』実践でもなく『科学主義的』実践でもなく：社会問題の構築主義的フィールドワークの可能性をめぐって」『文化と社会』マルジュ社.

【「『どのように』と「なに」の往還」について深めるための参考文献】

中河伸俊，1999，『社会問題の社会学：構築主義アプローチの新展開』世界思想社.
J. グブリアム・J. A. ホルスタイン，中河伸俊ほか（訳），1997，『家族とは何か』新曜社.
中河伸俊・北澤毅・土井隆義（編），2002，『社会構築主義のスペクトラム』ナカニシヤ出版.

社会問題の構築主義的研究の古典といえば，スペクターとキッセの『社会問題の構築』だが，この立場の研究の基本的発想と近年の展開とをおさえるには，（現時点でみれば不備や不適切な論点もあるとはいえ）いまだに上の拙著が手っ取り早い．いっぽう，グブリアムとホルスタインはこの間，構築主義的研究の発想を，さまざまな分野の調査研究に使えるより一般的なプログラムとして整備する作業を精力的に行ってきた．『家族とは何か』はそれを，家族研究に当てはめるとどのようになるかを示したものである．最後の『社会構築主義のスペクトラム』には，方法論をめぐる議論（エスノメソドロジーやシステム理論との対話）だけでなく，日本での構築主義的な経験的研究のさまざまな実例が収録されている．ただし，わが国での経験的研究は，米国でのそれに比べればまだ質量ともに萌芽的なので，調査研究のお手本を探したい人は，本書だけでなく，何冊も出ている英文の社会問題の構築主義のリーダーや論集にも目を向けてほしい．

の下で〈社会〉を切り取る試みとして捉え，あわせてその試みの背後にある認識的根拠を探ることを目的とする．経験知はいかにして可能なのか．これが本書に収められた諸論文を繋ぐ糸である．

*

本書の刊行にあたっては，勁草書房編集部の徳田慎一郎氏にたいへんご尽力いただいた．本書の構想は，『理論と方法』の特集シリーズのねらいに大いに共感を示された徳田氏から市販本としての刊行を熱心に勧められたことを直接のきっかけとしている．その意味で，本書はまさしく徳田氏の熱意の産物にほかならなず，ここに心よりの謝意を表したい．また，本書の刊行を快く承諾していただき，かつ奨励していただいた数理社会学会理事会の方々にも改めて御礼申し上げたい．

2004年12月

盛山和夫
土場　学
野宮大志郎
織田輝哉

〈社会〉への知／現代社会学の理論と方法（下）

経験知の現在

目次

『〈社会〉への知／現代社会学の理論と方法』の刊行にあたって
盛山和夫・土場学・野宮大志郎・織田輝哉

序　章　新しい〈社会〉への知を求めて　**経験的研究からの挑戦**
野宮大志郎

1　経験的研究の認識論と方法論　1
2　経験的研究の諸相　2
3　経験的研究の社会認識　12
4　〈社会〉への知のフロンティアへ　23

第Ⅰ部　経験を捉える眼

第1章　長期継続的な社会調査の最前線　**調査と理論との往還**
坂元慶行

1　「国民性調査」とは何か　29
2　長期継続的な社会調査の諸問題　31
3　日本人の意識の戦後史：1970年代以降の変化を中心に　40
4　「国民性調査」の課題と計量的日本人研究の意義　43

第2章　経験的研究におけるデータの「発見」　**理論からデータへ**
ロドニー・スターク
片野洋平・阿部悠貴訳

1　ワインの量から礼拝出席者を測定する　50
2　新興宗教の研究　52
3　クリスチャン・サイエンスの衰退を裏付ける　56

4　キリスト教の勃興を「測定」する　57
5　魔女狩り　61
6　結論　64

第3章　古くからの課題に答える　**マルチレベル・モデルの可能性**
ジョン・P. ホフマン
山本英弘・藤田泰昌訳

1　「層」をなす社会現象／階層的データ　67
2　マルチレベル・モデルの基本的なアプローチ　70
3　マルチレベルの手法を用いて縦断的データを分析する　77
4　マルチレベル・モデルの拡張　80
5　結論　81

第4章　人生の出来事と記憶　**データの質的／量的側面の活かし方**
高橋正樹・岸野洋久

1　個人の人生経験をどうとらえるか　85
2　ライフイベントの分析：思い出の持続と置き換わり　90
3　考察：ライフイベントと自伝的記憶　99
4　人生経験研究のこれからの課題　100

第Ⅱ部　経験を解釈する力

第5章　実証主義の興亡　**科学哲学の視座と所見**　野家啓一

1　「実証主義」の時代背景　105
2　実証的方法（1）　観察と実験　108
3　実証的方法（2）　検証と反証　112
4　ポスト実証主義　115

5　社会科学と物語り論　120

第6章　言説の歴史を書く　**言説の歴史社会学の作法**　赤川学

1　フーコーの問いから何を継受するか　125
2　フーコーの言説分析がめざしたこと　126
3　言説分析は，フィールドワークとどう異なるか　129
4　言説分析は，内容分析とどう異なるか　132
5　言説の歴史社会学は，why の問いを放棄しない　137
6　言説分析の志　141

第7章　解釈と実践　**カルチュラル・スタディーズの射程**　伊藤公雄

1　カルチュラル・スタディーズとは？　145
2　カルチュラル・スタディーズの「来歴」　146
3　「文化」の再定義：ブリティッシュ・カルチュラリズムの発展　148
4　脱領域の学としてのカルチュラル・スタディーズ　150
5　アルチュセールからグラムシへ：ヘゲモニー論の射程　153
6　解釈の政治学：エスノグラフィーという方法　156
7　カルチュラル・スタディーズ，その「危うさ」と可能性　158
8　カルチュラル・スタディーズが日本の社会（科）学に問いかけるもの　161

第8章　「どのように」と「なに」の往還
エンピリカルな構築主義への招待
中河伸俊

1　構築主義とは何だったのか　165
2　「なに」と「どのように」：リサーチ・クエッションの選択肢　168
3　エンピリカルであることと「なぜ」の回避　175
4　「どのように」と「なに」の往還，および別種の「なぜ」の可能性　182

第9章　差異の政治
ポストモダン・フェミニズムの認識地平と戦略そして可能性
坂本佳鶴恵

1　90年代のフェミニズム　191
2　ポストモダン・フェミニズムの問題の地平　194
3　反本質主義　195
4　差異の分析　198
5　変革への戦略　200
6　日本の文脈におけるポストモダン・フェミニズムの意味　203
7　ポストモダン・フェミニズムの課題　206

索引

編著者略歴・執筆者略歴

〈社会〉への知／現代社会学の理論と方法（下）
経験知の現在

2005年8月25日　第1版第1刷発行

編著者　盛山和夫
土場学
野宮大志郎
織田輝哉

発行者　井村寿人

発行所　株式会社　勁草書房

112-0005 東京都文京区水道2-1-1 振替 00150-2-175253
（編集）電話 03-3815-5277／FAX 03-3814-6968
（営業）電話 03-3814-6861／FAX 03-3814-6854
三協美術印刷・牧製本

©SEIYAMA Kazuo, DOBA Gaku, NOMIYA Daishiro, ODA Teruya 2005

ISBN 4-326-60189-2　Printed in Japan

JCLS ＜㈱日本著作出版権管理システム委託出版物＞
本書の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。
複写される場合は、そのつど事前に㈱日本著作出版権管理システム
（電話 03-3817-5670、FAX03-3815-8199）の許諾を得てください。

＊落丁本・乱丁本はお取替いたします。

http://www.keisoshobo.co.jp